



情報源：撮影 長谷川健一氏

馬鹿につける薬なし

原発で 手足ちぎられ 酪農家

6/7 AM 9:30

やる気力 なくした

6/10 PM 1:00

原発さえなければ

姉ちゃんには大変お世話になりました

長い間お世話になりました

私の限度をこしました

2011 6/10 PM 1:30

ごめんなさい

大工さんに保険金で支払ってください

原発さえなければと思います

残った酪農家は原発にまけないで頑張ってください

先立つ不幸を

仕事をする気力をなくしました

ケサコさんにはことばで言えないくらいにお世話になりました

妻 長男 次男

ごめんなさい 何もできない父親でした

仏様の両親にも もうしわけございません。

参考：豊田直巳著 『フクシマ元年』（毎日新聞社 2012.03.30）第4章 酪農家の死

■2011年6月20日 朝日新聞『新築の壁に残した無念 福島・酪農家の男性自殺』より抜粋（一部リライト）
福島県相馬市の酪農家（男性 54）の縊死。「遺書」は、新築したばかりの堆肥舎の壁に残されていた。男性は、1Fから約60キロ離れた相馬市の山あいの小さな集落で、約40頭の乳牛を飼っていた。真面目で仕事熱心——。酪農家仲間や知人の一致した印象だ。午前3時から牧草を刈り、牛の世話をした。世話を終えた後に、畑仕事に出ることもあった。昨年末には、堆肥をつくって売るために堆肥舎を新築し、農機具も少しずつ増やししながら、父親から継いだ牧場を大きくしようと懸命に働いていたという。原発事故で3月21日に原乳が出荷停止となり、搾った原乳を捨てる日々が約1ヶ月続いた。「牛乳が出せないからお金も入らない」と仲間たちにこぼした。男性が所属するJA そうま酪農部会の酪農家28戸のうち、営業を再開できたのは16戸だけだった。男性はフィリピン人の妻(32)と長男(6)、次男(5)の4人暮らしだった。妻が、牛舎で牛の世話を手伝った。妻子は4月中旬、原発事故を心配したフィリピン政府に促されて帰国した。長男の入学式の直前だった。男性は同月下旬、妻子を追って出国した。「おらだめだ。べこ(牛) やめて、出て行く」「子どもがなくて寂しい」と周囲に漏らしていた。フィリピンに行った男性は、連絡をしてきた知人に「牛は処分してけろ」と頼んだ。近所の農家や仲間が手分けして世話をすることを決め、引き取った。5月初旬、男性は1人で帰国した。「戻る気はなかったけど、言葉も通じなくて」。牛舎から牛は1頭もいなくなっていた。「迷惑をかけてすまなかった」と酪農仲間におびたという。11日午前、訪問したJA職員が、亡くなっている男性を堆肥舎で見つけた。ベニヤの壁には、白いチョークでメッセージが残されていた。男性が残した書き置きには2人の知人の名が記されていた。新しい堆肥舎を建てた大工の男性。その代金を完済しておらず、「保険で全て支払ってください。ごめんなさい」とあった。もう一人、隣の酪農家(64)には「言葉で言えないくらいにお世話になりました」と書き残した。この酪農家は「体は大きいけど気は小さくて、仕事一筋の真面目な人だった。もう、ああいう人を出してはいけない」と話した。